［シンポジウム 2］

明治期におけるドイツ醫學の受容と普及

吉良　枝郎

順天堂大学・自治医科大学名誉教授

明治初期までのわが国へ，近代医学を紹介し導入に貢献した西欧医学教師となると，シーボルト，ポンペそしてミュルレルの3人があげられることには異論はないであろう．

シーボルトは，18世紀ヨーロッパに広く普及したオランダ，ライデンのブールハーブエにより創始されたベッドサイドでの臨床教育を長崎，鳴滝塾で日本人医師に披露した．呉健がいうところの「実験的臨床医学」を教授したのである．彼は，日本人医師が物理，化学，数学，生物学などの基礎的知識に欠けていると意識したのではあろうが，わが国の医学教育がいかにあるべきかまでは論及しなかった．

わが国の医学教育がいかに改革さるべきかを初めて開示し，それを実践したのはポンペである．‘彼独力で’ではあるが，物理，化学を基礎に，解剖，生理，病理，内科，外科を系統的に5年で講義し，人体解剖を学生に供覧し，洋式病院を創設し，病院での臨床教育も実施した．この医学教育のシステム化は，さらにポンペの後任のボードウインによる基礎科学担当のハラタマの招請，維新に入りマンスフェルト，長与専斎による長崎医学校への基礎課程，本科課程を導入した医学教育の系統化につながる．

ポンペの帰国後幕府医学校に復帰し副頭取，頭取の緒方洪庵の急死により頭取に昇格した松本良順は，ポンペの講義を自分で記録した「朋百七科書」をもとに，医学教育を医学所に導入しようとした．しかし，洪庵の弟子が主体であった医学所教員に抵抗された．維新直後に，ボードウインと共に新しい医学教育を長崎医学校に導入した長与専斎はその経験に期待が持たれたのであろう，明治四年長崎から大学東校小教授として転任を命じられた．しかし，大学東校には加わらず岩倉具視の欧米使節団の一員に転出した．当時の大学東校の医学教育に違和を感じたのであろう．

ポンペ，マンスフェルトと長与らの努力の結果であろう，物理，化学の基礎科学は取り入れられてはいたが，明治3年公表された大学東校規定は各藩の藩校，村の寺子屋で伝統的に受け継がれてきた個人教授を主体とする教育法であった．当局は，当初その教員の一員としての参加をミュルレルらドイツ人教師に期待していたのである．彼らはまず，これらを改める極めてドラスチックな医学教育改革からはじめなければならなかった．

当時のドイツ式医学カリキュラムをドイツ語で学ぶと云う極めて厳しい条件に，少なからざる学生が方向転換を余儀なくされたが，明治9年に東校入学の学生が，12年からは東京大学医学部からの卒業生が輩出された。成績優秀な3名の卒業生が将来の東京大学医学部教員候補としてドイツ留学を命じられ，また幾人かが軍医，内務省への道を選んだが，卒業生の大半は当時各県に創設された医学校に，彼らの受容したドイツ醫學を教える教員として赴任した．医学校には県病院が併設された．乙種医学校は一人の医学士が，甲種医学校には3人の医学士が赴任した．甲種医学校卒業生には，東京大学医学部卒業生と同じく開業医試験は免除された．教えた医学生を通じて，また病院での診療を通じて彼ら自身が県民に，ドイツ人教師から受容した新しい醫學を普及させたのである．複数の県を数年間に亘り移動した卒業生，一カ所に長期に滞在して活動した卒業生，2–3年一カ所という例もあるが，少なくとも演者が調べえた明治31年までは，各年度卒業生の半数以上が各県に赴任した．医学校閉鎖後も，各県に残り，県立病院の院長として，また任地で開業して，その地域の医会，医師会の指導者として活躍した記録も少なからず残されている。知り得ただけでも，23年までに伝染病，結核で，6名が若くして任地で殉職した．